

# 言葉の使い方にこだわった言語活動を展開できる子どもの育成に向けての 大学と附属学校との連携国語科授業研究

研究代表者：和歌山大学教育学部 丸山 範高

共同研究者：附属小学校 宮脇 隼

## 1. 研究の目的と方法

本研究の目的は、言葉とその運用にこだわった言語活動を展開できる子どもの育成に向けて、大学教員と附属学校教員とが連携し、授業改善のあり方を検討することにある。そこで、共同研究者が実践する小学校国語科授業を大学教員が観察するとともに、研究的協議を重ね、さらに、一年間を通じた子どもたちの言葉の学びの変容を見取ることによって、言葉の学びを豊かにする国語科授業のあり方について考察した。なお、研究的協議においては、子どもたちの言葉の学びの事実を根拠とした対話を行いつつ、単元計画や教材分析のあり方・授業展開方法など授業づくり全般わたる検討を行った。

## 2. 共同研究活動の概要

本共同研究は、授業実践前の事前協議（指導計画の事前検討）、授業実践とその観察、授業実践後の事後協議（授業の事実に基づく成果と今後の課題への展望）からなる。

### 2-1. 授業①

【実施時期】 2023年7月

【対象児童】 小学校1年

【教材】 「おおきなかぶ」（光村図書『国語一上』pp. 68-79.）

#### 【授業概要】

- ・登場人物とナレーター、それぞれ役割を分け、かぶを抜く動作を交えながら全員で音読する。
- ・本時のめあての提示：おじいさんの発言「あまい あまい かぶになれ。～」における読み方の工夫を考える。
- ・前時の学習内容の確認：「うんとこしょ、どっこいしょ」の読み方として、「どんだん声を大きくする」「ため息をつきながら読む」などの工夫があったことを確認した。
- ・本時の課題について、ノートに考えを書く。
- ・教師の問いかけ「おじいさんは「あまい」や「おおきな」をなぜ2回言っているのか。」に対して、児童は「1回だと小さくなる」「本当になってほしいから」などの発言をした。
- ・本時の課題についての意見発表：「楽しみに出でてくるのを待っているように読めばいい」「ちょっとゆっくり」「心がこもっているように言う」など

#### 【事後協議】

- ・本時のねらいは、2回繰り返される「あまい」「おおきな」に注目し、「おじいさん」の願いを読み取り、音読活動に反映させることであった。

- ・今後の課題①：本時のめあて提示前の動作化を含めた音読に時間を使いすぎた。しかし、単純に概念的におじいさんの気持ちを発問するのではなく、かぶ抜き動作を経験させることで、作品世界のイメージがストレートに子どもたちに届くと考える。1年生の国語学習には、動作を伴った音読活動は重要である。
- ・今後の課題②：発問「おじいさんは「あまい」や「おおきな」をなぜ2回言っているのか。」は、読み方の工夫（本時のめあて）を考えノートに書かせる前段階で提示した方が学習の深まりが期待できる。実際の授業では、考えをノートに書かせた後で発問したため、発問で考えたことがノート記述に反映できていない子どもも見られると思われる。
- ・今後の課題③：板書について、子供の発言を順々に羅列するのではなく、おじいさんの行動と読み方の工夫に関する意見と、それぞれの内容を前と後に分割して書くなどの工夫があってもよかった。
- ・今後の課題④：本単元での学習を発展すべく、繰り返し表現など、低学年の文学教材特有の表現に注目し、言葉のおもしろさを捉え、音読活動に反映できるような実践を計画している。
- ・今後の課題⑤：文学教材の音読を通して、(1) 既習語彙を言語生活で使えるように導くこと、(2) 同じ繰り返し表現であっても教材が変わることで読み方を変える必要性に気づかせること、など、子どもたちの言葉への感度を高める実践を継続したい。

## 2-2. 授業②

【実施時期】 2023年10月

【対象児童】 小学校1年

【単 元】 自分と結び付けて読もう

【教 材】 絵本「バスが来ましたよ」（アリス館）

### 【授業概要】

- ・本文通読
- ・本時のめあての提示：さきさんは、どんなことを考えながら山崎さんに話しかけたのかな？
- ・場面の様子をつかむために鍵となる言葉に着目し、登場人物になりきって発言したり登場人物の動作をまねたりしつつ、イメージを豊かにした。
- ・本時のめあてについて、ノートに考えを書く。その際、登場人物は、なぜ、手をそえながら話しかけるのかをふまえて書くようにする。
- ・本時のめあてについての意見発表：「体の不自由な登場人物が転んだりしないように慎重に話しかけた」「手をそえず声だけでは誰が話しかけたのかがわからない」など

### 【事後協議】

- ・本単元のねらいは、生活科と関連させること、学級の仲間と交流しながら学びを豊かにすること、国語科としての言葉の学びを確かなものにする、こと、である。
- ・動作化を取り入れたところが本実践の特徴であるが、動作化は年度当初の4月から行っており、子どもたちにとってなじみのある言語活動となっている。文章を読む学習に動

作化を取り入れるのは、他者の読みをサポートすることができるとともに、自分の読みを深めることにもつながるためである。

- ・今後の課題①：作品の文脈と関係なさそうに思われる子どもの発言も積極的に取り上げ、多様な読みを尊重しようとする雰囲気は大切である。しかし、子どもの発言を取り上げ、学級で共有する際には、その発言と関係しそうな教材文の言葉を対照させながら考えを深めることも重要である。
- ・今後の課題②：語り手が語る対象人物の気持ちの読み取りを課題としたが、語り手にもっと寄り添った授業展開が求められるのではないかという指摘がなされた。1年生の子どもたちには年輩の語り手よりも同じ小学生である対象人物の方が同化しやすく、言葉の学習を確かなものとするためにも、対象人物に寄り添うことが重要と考えて授業を構想した。
- ・今後の課題③：本時では「深めたい表現では、言葉を比較させ」「自身の経験と結びつけて感想や考えをもつ」学習が豊かに展開されていた。しかし、比較させる言葉をさらに重層的に増やしていくことで、より作品世界が豊かに読み取ることができるため、本時で比較対象として取り上げなかった言葉についても目配りが必要である。

### 3. 年間を通じた実践の概要と子どもたちの学びの変化

#### 3-1. 年間を通じた実践の概要

文学教材と説明文教材、いずれの授業においても、子供たちの言葉へのこだわりを高める授業を心がけている。細かな言葉に注目する国語科授業を日常的に行ってきたため、そうした取り組みがごく自然なものとして子どもたちの中に浸透してきている。

文学教材では、注目すべき言葉を取り上げ、その動作化を読み取りの際の方法として活用することが多い。ある言葉が教材文中でどのような働きをしているのかについて、子どもたちが自覚的になれるような場面を設定しながら授業を進めてきた。また、説明文教材では、問いの文章に注目して授業を行ってきた。小学校説明文教材では、一文で、一つの事柄を問うもの(教材「くちばし」)と、二つの事柄を問うもの(教材「うみのかくれんぼ」)とがある。一つの事柄を問う教材と二つの事柄を問う教材とでは、その答えに相当する箇所への注目の仕方が異なってくる。そうした言葉によって示される内容の違いに気づき、教材を読み深めることができるような授業を実践してきた。

#### 3-2. 年間を通じた子どもたちの学びの変化

学級の子どもたちは、国語科の授業がきっかけとなり言葉への感度が高まってきている。

動作化を取り入れた文学教材の授業では、子供たちは自然と細かな言葉に着目し、自身の行動に移すことができる。さらに、友達や先生の動作化や発言が自分の考えるものと違う場合は、「違う」と言える子が多くなってきている。仲間を大切にすることを根底にしながらも、違うものは違うと言える雰囲気が学級の中で生まれ、言葉へ立ち止まるきっかけを生み出している。

また、問いの文章に注目して読み進める説明文教材の授業で子供たちは、何が問われているのかを注意深く読み取れるようになってきている。そして、こうした言葉へのこだわりは、算数科での学習の充実につながっている。算数科の文章問題では「どちらが、どれ

だけ多いでしょう。」と二つの事柄を問う問いがある。このような問題に出会うと、子供たちの多くは「二つのことを聞かれている」と気づき、発言をしたり、近くの子に教え合ったりしている。このように、国語科と算数科とを教師が意図的に関連させながら、教科横断的に学習を進めることで、子供たちに確かな力が身につけてきている。

しかしながら、その一方で、特定の教材で学び得た言葉の力が別の学習文脈で十分発揮されているかどうかについては疑わしいところがある。教師が気づかせる、あるいは、気づくまでしかける授業を行っているに過ぎないという感覚も拭いきれない。

#### **4. 結語**

子どもたちの豊かで確かな言葉の学びを導く授業は、教材開発や単元開発だけでは成立しない。年間を通じた子どもの学びのつながり（過去・現在・未来）を見取り見通し、意味づけていくことが必要不可欠である。個々の授業場面での子どもの学びを意味づけること、そして、その意味づけを教材開発・単元開発へ緊密につなげること、その往還が授業改善のために求められる。